

福井藩を襲った

お市の祟り!?

呪われた松平忠直と光道

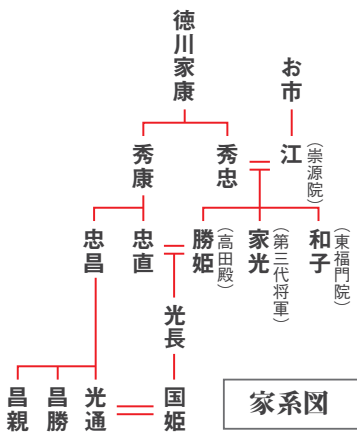


柴 田勝家と妻、お市が自刃して果てた地、北庄（現在の福井市）。お市は、敵将、豊臣秀吉と徳川家康に対して「死んでもこの恨みは忘れない」と呪ったといひます（松平春嶽著「眞雪草子」）。その呪いが、その後福井藩主となった家康の孫、松平忠直や曾孫の松平光通の不幸な結末を引き起こしたとのうわさが福井城下で流布していたといひます。その理由は何だったのでしょうか。

北庄落城の際、お市の娘、茶々、初、江は敵将、秀吉に託され城を出しました。その後、茶々は秀吉の妻となり、初は若狭小浜藩主、京極高次に嫁ぎます。そして、江は第2代将

軍、徳川秀忠の正室に迎えられ、二男五女をもうけました。その江の三女、勝姫は、第2代福井藩主、忠直の正室として、母の悲しい思い出の地、北庄に興入れしたのです。

慶長16（1611）年、忠直17歳、



勝姫11歳、総勢4千人もの従者を伴う豪華な輿入れでした。しかし、三人の子をもうけた後、夫婦仲は悪化。忠直は、勝姫の父である將軍、秀忠の機嫌を損ね、元和9（1623）年、豊後（大分県）に流されます。その後、忠直の弟、松平忠昌が北庄を拝領しました。

さらに、明暦元（1655）年、忠昌の嫡男、光通は、従兄である松平光長の娘、国姫を正室に迎えました。光通と国姫の祖母、勝姫との関係がうまくいかず、国姫は板挟みを苦に自殺します。光通も後を追うように自刃したのです。

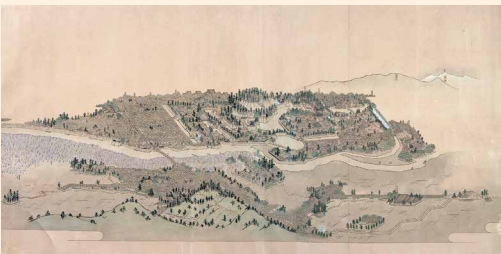
北庄を舞台にした忠直の左遷と光通の自殺。この一連の凶事にはある共通点があります。それは、勝姫が陰で関わっていることです。勝姫は非常にプライドが高く、しかも執念深かったといひます。勝姫は、忠直の行動を、父、秀忠に事実を歪曲し告げ口していました。また、わが子光長に越前国が与えられなかったことを根に持ち、同国を継承した忠昌とその子、光通との関係を悪化させました。彼女の頑迷さが、忠直を狂わせ、光通と国姫を死に追いやったのかもしれない。

お市の三女、江（宗源院）と孫の

勝姫（天宗院）の名前をみると、二人の院号には「崇」の字が含まれています。当時の人々は、「崇」を持つ二人に「お市の祟り」が現れたと信じたといひます。しかし、「崇（あがめるの意）」は「崇（たりの意）」と字は似ていますが、意味が全く異なります。当時の人々はそれを知ってか知らずか、言い伝えていったのです。歴史は史料の解釈で語られることが多いですが、時には、想像や勘違いから語られることもあるのかもしれない。

関連史料・ゆかりの地

福井城下眺望図



（福井市立郷土歴史博物館蔵）

寛政年間（1789～1801）頃の福井城下の様子を描いた眺望図。季節は春で足羽河原の桃林ではいっせいに開花を迎えています。福井城を取り囲む武家屋敷、北陸道に沿って西側から北側に広がる町屋や寺社が一望され、当時の風景を知ることができます。

参考資料等

松原信之編『福井県の不思議事典』新人物往来社、吉川博和『忠直に迫る 越前宰相の狂気と正気』創文堂印刷
ふくい女性の歴史編さん委員会編『ふくい女性の歴史』福井県